

おしゃべり ■ 鏡のなかで
あるオペラ歌手の華麗な瞬間

ルイ・ルネ・デ・フォレ
清水 徹 訳

新しい世界の文学

白水社

新しい世界の文学 31
おしゃべり
あるオペラ歌手の華麗な瞬間
鏡のなかで

定価 五〇〇円

訳者略歴
一九三一年生
一九五四年東大仏文科卒

明治学院大学助教授

主要訳書

ビュッセル「時間割」「心変わり」
ヴァレリー「テスト氏」(共訳)

訳者 ① 清水^{みず}徹^{とほる}

発行者 草野貞之

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京三三二二八

理想社印刷・大光堂製本

おし
ゃ
べり

ほ
か
二
編

LOUIS-RENÉ DES FORÊTS

Le Bavard

Les Grands moments d'un chanteur

Dans un miroir

© Editions Gallimard 1946 et 1960

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

おしゃべり
あるオペラ歌手の華麗な瞬間
鏡のなかで

ルイ・ルネ・デ・フォレ
清水 徹 訳

白水社

新しい世界の文学

目次

あるオペラ歌手の華麗な瞬間	一六
鏡のなかで	三七
あとがき	三〇三

おし
ゃ
べり

ジャ
ニー
ヌ・
カレ
に

かれは狂おしいばかりに話したくてしかたがない、
話さなければ息がつまり、張り裂けそうだ。

リヴァロール

ぼくはよく鏡に眺め入る。自分のまなざしになにか悲愴なものを見つけたすが、いつもぼくの最大の望みだったから。恋に眼がくらんだり、自分のかたわらにぼくを引き止めておくために、あなたはほんとうに美男子だわとか、精力的な顔をしてるのねとか、思ってもないことを口にする女たちより、聞きとれるか聞きとれぬかの声で、おどおどしているような慎ましさで、あなたはあまりほかの男たちみたいではないわと言ってくれる女たちのほうが、いつでも好きだったと自分でも思っている。じっさい、ぼくのいちばん魅力的なところは、ぼくの奇矯さにちがいないと、長いあいだ思いこんできたものだ。他人とはちがうというこの感覚、ぼくはそこに高揚感の主要な源泉を探ってきた。だが、そんな自惚れがすこしなくなってしまういまは、自分があらゆる点で月並みな男だという事実を、どうやって見ないですまされよう。ぼくはいま、こう書きながら顔をゆがめている。これほど堪えがたい真実を、ぼくがやっといまごろになって知る、まあ、それだけならまだいい、だけど、こうやってきみたちにまで知ら

せるとは！ だけど、ほんとうを言えば、そんなぼくの困惑のなかには、公衆の興味をひく可能性など万に一つもないのにあえて自分の欠陥をさらけ出すときに感じられる、あのかすかな苦々しい快感が、そっと滑りこんでいる。ぼくが自己を告白しようと企てたのは、そういうすこし病的な快感を味わうためではないのか、たぶんそうたずねられるだろう、ぼくとしては、いま言ったこの快感を、お上品な人びとが、自分の下唇にわざとつけたかすり傷を人さし指のさきで気取ってゆっくりと撫でたり、未熟なレモンの果肉に舌のさきでさわったりして求める快感になぞらえてみたい。こうなると、ぼくは微笑を禁じえなくなる、微笑しながらきみたちここう答えるわけだ、ぼくはあまり告白癖がないのを誇りに思っている、と。なるほど友人たちはぼくが沈黙そのものだと言う、一旦ぼくが秘密を守ろうと決めたら、いかに手練手管を弄しても、どうしてもぼくの口を割らせることができなかったというのを、かれらは否定しないだろう。それどころか、どうしても心を打ち明けることができぬというぼくのこの性質を、憐れみをそそる、かなり重大な欠点とみんなが一致してみなしているのだ、と、ここまで書いてくると、ぼくはもう矢も楯もたまらなくなつて、こう書きそえる、——じつはぼくは陰險な虚栄心に駆られてみんなのそういう信念を利用してやろうと企てていたのだ、つまり、告白ができぬというこの嘆かわしい片輪な性格ゆえに苦しんでいたというふりを装い、あるいはたんにその苦悩を誇張してみせ、まるでぼくがじつはなにか大きな秘密をかかこんでいるのだけ

れど、なにしろその秘密が例外的でしかも私事にわたるため、絶対白状してはいけないものなんだと思いこんで、そのため秘密を打ち明けて重荷を降ろしほっと息をつくということができなくて、それで苦しんでいたんだと言わんばかりにすれば、みんなの信念を利用できると考えていたのだ——こんなことを書きそえて、まえに述べたのと同じ嗜虐的な快感を味わうというわけなのである。

だが、熱中の赴くままに引きずられていると、やがてぼくは自分ではいだったこともない下心を自分自身になすりつけて、あげくのはてに、侮辱を免れようとはおよそねがわぬ真率な男というふうに自分を見せかけてしまいうさだ。だから、ぼくがペンを取ったのは、きみたちにはぼく自身のことを話すという快感のためではない、ぼくの文学的才能をひけらかすためでもない。ここでぼくは余談をはじめなければならぬのだが、きみたち自身だって経験があるはずだ、率直に自分のことを説明しようと試みると、たちまち、きみたちは、自分で使っている断定的な文章の一つ一つに、疑惑を示す文章を添えなければならなくなる、こいつは、たいていの場合、きみたちが断定したばかりのことを否定するのと等しいので、要するに、暗闇のなかにはなにひとつ残しておけないという少々癪な良心の呵責とやらを、どうしてもふるい落とせないわけだ。だから前にも言ったように、これらの文章を紙の上に並べてゆくためにどうい

言葉づかいを借りてくるかなんてことは、ぼくはおよそまったく氣にかけない。およそまったく、というのは言いすぎかな。生来ぼくの好みは、暗示的な、色彩豊かな、情熱的な、暗い、せせら笑うような文体に向かうのだが、今日のぼくは、あまり厭な思いもしないで、形式に凝ることはいいさい忘れようと決意した、だからぼくはいま、ぼくのものではない文体で書いている。つまりぼくは、いつでも自由に取り出して使えるつまらぬ文体の魅力など、すべて退けてしまったのだ、もっとも、この文体の魅力については、まんざら誇りに思っていないわけでもないのだが。（ちょっと待った、もっとも、からあとにはすこし嘘が混じっている。ぼくの文体の魅力とやらの正体が何か、ぼく自身よく承知している、それはかなり平凡な熟練というにすぎぬものの結実なんだ。）このことに、こう付け加えておいてくれたまえ——ぼくの生来の文体は告解所の文体ではないとね、他の無数の文体にそっくりだとしても、なにも驚くにはあたらない、といって、ぼくは氣取ってこう言ってるわけじゃない、いいね、きみたちに注意しておくよ。

さてそれでは、下劣な自己露出へとぼくを導いた理由に取りかかるところにしよう。きみたちはついでに、ぼくが少々冷やかすような口調にのめり込んでいるのに氣がつくだろう、こういうぼくの態度は、裏表がなくまじめであろう、挑戦的でもなく愛想よくもしまいというぼくの決意に反するけれど、きみたちだって、これと同じ実験を試みてみればわかるさ、なにが確信

とやらにかゝつ、かゝ興奮しているのでもないかぎり、厚顔無恥ということのあの気持のいい戯れなどいっさい忘れて、重々しい口調で自己を語ることほどむずかしいことはないんだ。きみたちは滑稽に見えるのを恐れるだろうが、きみたちがどれほど良心的に内面を吐露してみせたところで、かならずその告白のなかで、反語イロニがどうしても押えきれずにあらわれて、のさばってしまうことになる。だから卑怯者は、厚顔無恥か冗談か、どっちかの曖昧さのかげに真理を隠すのだ。ねえ読者さんよ、こういうぼくをきみは軽蔑してるね、だけど、ぼくが自分の悪癖を誇張しているってことも、きみにはよくわかつている。その二つを調整するのは、きみのほうの仕事さ。このいっさいを、行為そのものという点で見れば——思考とまでは言わないがね——無邪気そのもので格別非とするに当たらない露出狂の、根も葉もないでっちあげだと考えてもかまわないだよ、なにもきみにそれを禁じてはいない。でと、それじゃ例の理由に取りかかりますか。実をいうと、理由なんてたった一つしかない、はっきり言って、それはこの上なく喜劇的な理由なんだ。

ぼくの推定では、きみたちの大部分が、あのよく見かけるおしゃべりたちのひとりに上着の襟を掴まえられたことがあると思う。自分の声の響きを聞かせたくてうずうずしているそいつらは、耳を傾けるということだけが役目で、一方口を開く義務はないという相手はいないものかと捜しまわっている連中だ。いやそれどころか、この迷惑至極な男が、自分の話をぜひ聞い